

第二回岡山外科会演説抄録

会 期. 昭和28年9月27日(日)
会 場. 倉敷市倉敷中央病院講堂

1. 先天性腎腫瘍の1治験例

岡大津田外科 ○谷野順造・石田秀和

症例 2年10ヶ月男子にて、腹部腫瘍を主訴とし他に著明な自覚的及び他覚的所見を認めなかつた。腫瘍は完全に摘出し得て、全治退院した。腫瘍の大きさは7 cm×8 cm×10 cmにして重量は439g。組織標本所見は管状腺癌と考えられる。

2. 最近経験した消化管のNeurinom2例

岡大陣内外科 ○高越秀明・小野正員

消化管に発生した Neurinom は他の部のものに比し比較的稀で特に本邦に於ては珍らしい疾患とされている。文献によれば消化管中では胃に最も多く次で小腸、直腸の順となつている。臨床的には無症状に経過する場合の方が多いが、症状を呈する場合には胃潰瘍、腸閉塞、虫垂炎、直腸癌等と誤られ、手術後始めて発見せられるものが殆どである。吾々の例も直腸癌及び胃外腫瘍として手術せられた直腸及び胃 Neurinom の各1例であつた。

3. 小腸重積症の2治験例

倉敷市小畑外科病院 山田勳男

腫重積症は私共が屢々遭遇する疾患でありその大部分は回盲部に見られるものであるが、私は最近小畑病院に於て小腸重積症の2例を経験し、その1例はメッケル氏憩室が原因となり他の1例は廻腸脂肪腫が原因となつたもので、共に手術的に治癒せしめ得た症例に就き報告する。

4. 腸管内腫瘍が起因となつた腸重積症の3例

倉敷中央病院 吉沢宣一

第1例は5ヶ月の男子で廻腸内先天性嚢腫に依る小腸2重々積症で術後6時間にて死亡す。

第2例は2年5ヶ月の男子でS字状結腸内ポリープに依る脱肛の形態を取つた直腸重積症で2回の手術後全治す。

第3例は51才の婦人で空腸内の線維肉腫に依る小腸重積症で術後悪性腫瘍の為、全身衰弱で死亡す。

以上の3例の経験に依り腸管内に腫瘍を認めた場合には、例え良性腫瘍でも腸重積症を起す危険があ

るから、必ず除去するのがよいと思考する。重積が始まると異常な強力な力が加わるものであるから姑息的治療では防止不能である。

5. 胆嚢水腫を伴える原発性胆嚢癌の1例

玉野三井病院 二宮道義

緒言

症例 60才の家婦

主訴 右季肋部の腫瘍及び軽度の圧痛

現病歴 6年前より慢性胆嚢炎、昨年10月より胆嚢水腫

術前診断 胆嚢水腫

手術 胆嚢切除術施行(2月3日)

術後 90日目黄疸及び悪液質にて死亡

剔除標本 慢性胆嚢炎像組織学上腺癌

文献的考察 ①原発性胆嚢癌の発生頻度 ②性別 ③好発年齢 ④胆石との関係 ⑤組織 ⑥発生部位 ⑦転位 ⑧臨床症状 ⑨予後 ⑩診断 ⑪治療

結語 組織学上初めて診断確定せる原発性胆嚢癌の1例

追加

齊藤圭(陣内外科)

庄原赤十字病院に於て、激しい黄疸が数ヶ月に亘つて存在する60才の男の患者を胆石症の診断のもとに開腹した処、フェテリ氏乳頭の部に拇指頭大の腫瘍があり臍頭部も固く、何れも癌の浸潤が及んでいるものと考えたので、胆嚢十二指腸吻合術のみを行つて手術を終えた処、術後患者は元気になり不思議に思つていた。処が1年後偶々他の疾患で開腹した処、以前の腫瘍も臍頭部の硬化も全く消失していた山岡教授は恐らく本症例は肝炎の一種であろうと述べられた。

6. 腰痛並坐骨神経痛に対する横突起切除の効果

済世会岡山病院 間野清志

対症療法にて軽快しない長年月に亘る頑固な腰痛並に坐骨神経痛を訴える患者にて、脊椎内に殆ど異常の認められぬものに第五横突起切除術を行い、拭い去る如く疼痛去り良結果をもたらした経験を述べ高山教授の提唱する所謂横突起障害なるものは案外多いものではないかということ並にこの手術は実地医家として行つてよい手術ではないかと述べた。

7. 腰痛と癥痕性腸間膜炎

岡大陣内外科 齊藤 圭

原因不明の腰痛は頗る多いが、最近私は癥痕性腸間膜炎に腰痛が屢々随伴して現われる事実を認め、而も腸間膜の癥痕を切除するか或は癥痕部腸管支配神経を腸間膜根部において切除すると頑固な腰痛も驚く程治癒に赴くことを知った。従来本症に腰痛が存在するという記載はないが、その原因を次のように考える。即ち腸間膜の癥痕がその部を通る求心性神経を刺戟して、これが反射的に腰部の筋肉に緊張を与えるのであろう。

8. ストッフエル氏手術—経験例

岡大金光分院 田中美登

23才女子で発病来約6ヶ月を経過した非遺伝性痙攣性脊髄麻痺の膝関節屈曲位攣縮に対し大腿二頭筋長頭枝は全切除、手膜様筋及び手腱様筋枝はその横断面の3/8を切除した。経過頗る良好で術後1年3ヶ月を経過した今日歩行は殆んど正常で約50m疾走も可能である。「ストッフエル」氏手術は再発が多いが症例にもよるが可及的多数の神経枝切除よりは、主たる攣縮筋神経枝は全切除し、他は温存的に処置した方が筋力の低下を最少限に止め、再発し難いと考える。

9. 距骨々折について

岡大陣内外科 高木秀雄・○林 幹彌

2例の距骨々折を報告した。1例は距骨頭部の単純骨折でX線写真でも中々発見され難かつた例である。他の1例は距骨脱臼骨折で距骨全剔出を施行し踝叉を載距突起前位に固定した例である。距骨々折の場合の距骨全剔出後の踝叉の固定位は載距突起上位にする方が載距突起前位に固定するよりも運動範囲が大きくなり有利ではないかと考える。

10. 腹壁腫瘍に就て

岡大津田外科 田辺剛造・○林 宏

腹壁腫瘍は稀なものでGurlt氏によると、全腫瘍の0.253%に当り、津田外科入院患者19720人中5例しか存在せず、最近経験せる繊維腫及び多形細胞肉腫の2例を報告し、次に津田外科症例及び我国に於ける報告例、総計35例について統計的に調査し、次の如き結果を得た。

1) 性は女に多く、お産に関係ありと云われている。

- 2) 年齢は男女共に20~40才に多い。
- 3) 発生部位は右下腹、次に左下腹部に多い。
- 4) 性質は繊維腫及び肉腫が多数を占めている。
- 5) 予後は摘出術により、大多数治癒している。

11. 難治なる術後腹壁瘻孔について

岡山市 佐藤次文

18才の未婚の女子、6ヶ月後虫垂炎に腹膜炎を併発、開腹手術の結果難治なる腹壁瘻孔をつくつたので、二次的開腹をするに瘻孔の先端は拇指頭大に炎衝肥大した右側輸卵管となり瘻孔の先端は子宮底に達す。依て輸卵管を子宮底に近く切除し瘻孔を根治さすことを得た。女子の難治なる術後腹壁瘻孔をつくつた場合輸卵管が関係していることを予想する要ありと思う。

12. 小児麻酔

岡山市 佐藤次文

満2才より満6才迄の8例の小児について「オーロバンソーダ」の筋肉注射麻酔をして満足すべき成績を得た。病名は鼠蹊ヘルニア6例、虫垂炎1例、腸電積症1例で麻酔の方法は勝屋外科教室の例に従つた。

1) 額田須賀夫 (津山市)

オーロバン筋注による麻酔の方法は私も大変良いと思つている。唯演者の使用量並に従来文献に発表されている使用量は大変少量ではたして十分な効果が上げられているか疑問に思う。もつと大量使用しても良いと思う。

2) 中西要之助 (福渡町立病院)

患児が術前に寝ていると不効です。又L. c. c. では第1回目は筋緊張がとれないので駄目。2回目からは宜しい。別に局所麻酔を用品います。

3) 福田 実 (陣内外科)

やはりこの麻酔は疼痛があるので注腸法が良いと思う。44.1mg/kgを用いる。外の麻酔を併用した方が良い。この麻酔は簡単ですがやはり呼吸麻痺には注意した方が良い。

13. Hyaluronidaseの臨牀

岡大津田外科 中邑哲郎

Hyaluronidase (Hyaluronidase. 1000 turbidity-reducing units.) の皮下輸液に対する効果を試みた。

即ちロック氏液1000c. c. の皮下注射に際し、HD液の使用に依り注射所要時間の短縮並びに疼痛の緩

和を示し、注射時の補助的操作（マッサージ）を不要とし注射部位の腫脹は瀰慢性に広く明らかに吸収能力の促進を認めた。注射時間は大体半減され皮下大量輸液を非常に容易ならしめる効果は著明である。副作用は皆無であった。

14. 減血圧下手術としての「トラボン」の使用経験

岡大陣内外科 浦久保富士雄・
○小野正員・馬場隆義

人為的低血圧により手術による出血を少なくし、手術野を見易くして術者の操作を容易ならしめる目的で教室では20例の頭蓋内手術にトラボンを使用して最高血圧 70~80mm Hg とし殆んど危険な副作用を認めずして目的を達し出血量を従来の約 $\frac{1}{2}$ に減少せしめた。尚ヘキサメトニウムは起立性低血圧を来す危険性あり、患者の体位変換に深基なる注意を要するが本剤は血管運動中枢に作用してそのトーンスを全般的に降下せしめるため個々の血圧調節機転は影響を受けず起立性低血圧を来す危険がないなど前者より一層便利である。

15. ストレプトキナーゼ・ドルナーゼ（ヴェリターゼ）の使用経験

岡大津田外科 根岸康躬

Varidase は SK の線維融解作用及び SD の desoxy-ribonucleoprotein 融解作用を利用し最近胸部外科にその利用価値を謳われている。演者の使用した Varidase は SK 10×104. SD 2500 単位のもので生理的食塩水 20c. c. にとかし之を Penicillin 20×10⁴ 単位と併用して胸腔穿刺により胸腔内に注入、12乃至24時間後に同所より穿刺排膿した。この際副作用として微弱な体温上昇、食慾不振、胸部疼痛があったが再出血、呼吸困難等の重篤なものはみられなかった。使用例は術後血胸 4、膿胸 2、流注膿瘍 1 であるが各例とも 2 乃至 3 回反覆使用し、使用時期は術後 8~27 日の間である。内 3 例に於て優秀な成績を得、肺再膨脹も認められたが外国文献にみる如き肺被膜剝離を之を以て代用すると言う如き顕著なものはみられなかった。之はその使用時期の撰定（早期使用が望ましく、症状発現より 5 日以内が良好。2 週日を経たものには無効と思われる。）用量（文献によれば一回使用量は演者の約 2 倍以上。）注入より排出までの時間（12 時間を超えると効果減少する様に思える）等に更に一考の余地があり、この点尙今

後も追究してみたいと思つている。

16. 慢性敗血症の 1 例

笠岡市 大野 定

36 才の経産婦、穿ろ術施行後、右膿胸兼自然気胸を起し、再三危地に陥りたるも開胸により膿胸等は治癒す。その後 2 ヶ月頃より貧血著明となり、心内膜炎を起し、脾、肝腫著明となり、40°C の熱発を伴うにいたる。抗生物質の投与により、各症状消退し現在僅かに心雑音を残すのみとなり、一般状態極めて良好となりたる症例につき経過を報告せんとす。

17. 脾臓皮下破裂 3 例について

笠岡市 小野雄啓

腹部の外傷に於て、内臓皮下破裂が存するか否かを直ちに診断しうる場合は非常に僅少である。病状監視も必要であるが、その為手術の時期を失する事がある。私は疑ある場合は直ちに試験的開腹術を行う。三例中二例は脾門部に於て横の方向に完全に断裂していた。この二例に対しては脾剝出を行つた。一例は縦の方向に全長に亘り大半破裂していた。之に対しては縫合を行つたが完全に止血するまでに緊縛し得なかつた。断裂の場合は剝出を、破裂の場合は可成大なる破裂でも縫合のみにて目的を達する事が出来ると思われる。

18 「シンポジウム」内臓出血

① 胃出血について

岡大金光分院 萱田静海・田淵典久

抄録なし

② 胃十二指腸潰瘍における出血と穿孔との関係

岡大津田外科 砂田輝武・内田 一

胃十二指腸潰瘍で出血をともなう穿孔例は全症例の 2% 程度であるが、かなりの出血例では両者の時間的間隔が比較的短く、殊に出血後潰瘍症状が増悪して遂に穿孔に至るものが多いことは出血と穿孔の直接の関連性を物語るものと考えられ、穿孔の僅か前に起つた出血は穿孔の警告信号とみなされる。かゝる例は多発性潰瘍で前壁と後壁に潰瘍があるか一つの潰瘍で前後壁に跨つて存する様な場合が多いことから病理解剖学的にも両者合併の可能性が説明される。

⑤I. N. A. H. 服用中にみられた大量の 下血潰瘍穿孔に対する胃切除の一治験例

国立岡山療養所 越智邦夫・岡本玉樹
西 純雄

肺結核患者(31才, 男)にイソニコチン酸ヒドラジッド投与(総量4.5g)中他に認むべき誘因もなく二回にわたる大量の下血を来しついで十二指腸潰瘍穿孔を来した症例に潰瘍を含め胃切除を行い経過良好であった一例を報告する。

④興味ある下血と剔脾術

倉敷市小堀病院 河田幸一・山田勳男

Milzvenenthrombose は稀な疾患であるが最近私共は発作性に来る下血と高度な貧血とを主訴として来院した15才の女性につき、臨床検査成績より Milzvenenthrombose と診断し剔脾術を施行した。其後貧血著明に恢復し下血全く消失して10ヶ月後の今日良好な経過をたどっている1例について報告した。

1) 佐藤次文(岡山市)

剔脾の寿命に及ぼす影響を知りたい。

2) 津田教授

手術の時期が関係するだろう。脾腫が長く続き肝障害があれば貧血等の症状が残るだろう。

3) 津田教授

脾腫のある小児例に於て剔脾後2回下血があつた。手術の時 A. gastrica brevis を結紮したので梗塞潰瘍、續いて出血したのではないかと思うが胃のX線寫真には異常がない。

⑥腹部紫斑病の1例

児島市民病院 坪井瑞博

著明なロイマチス性紫斑病で治療中の外来患者が急に腹痛を訴え、Schönlein-Henoch 氏紫斑病と診断したが数日後、廻盲部に腫瘤を生じ激烈な急性腹部症状を呈したので急性虫垂炎の併発を疑い開腹し、Schönlein-Henoch 氏病であつたことを知つた1例を報告した。

19. 口腔底及び硬口蓋に同時発生を みた表皮様嚢腫の一例

岡大陣内外科 惣路照道・○加地重博

所謂口腔底皮様嚢腫は比較的稀有なるものであるとは云え、内外共に数々の報告例がある。然し乍ら本症例の如く再三の剔出にもかかわらず、亦常に口腔底及び硬口蓋に同時発生をみた症例は未だ文献に

も見当らず、内外の統計を展望するに(1)表皮様嚢腫は固有皮様嚢腫より多い。(2)全皮様嚢腫に対し口腔底に生ずるものは3.3~13.0%で、(3)口腔内では舌下部に最も多く発生し、(4)年齢では20~30才が多く、(5)男女の比は僅に女子に多い様である。

20. 肺臓に原発した滑平筋肉腫の手術治験例

国立岡山病院 金本明久・井元 進。

○岡 利幸

最近国立岡山病院に於て、左下葉に発生した原発性限局性肺腫瘍の診断に依り、腫瘍を左下葉と共に切除摘出したが、組織学的検査に依り滑平筋肉腫なる事が分り、本邦最初の症例であるので発表報告する。

21. 「教室に於ける胃癌の手術成績」

岡大陣内 ○大杉実・近藤慶二

昭和23年4月以後9ヶ月間に当外科に入院し、胃癌の確定診断の下に退院せる204例につき統計的観察を行い、今回は主として術後満6ヶ月以上経過せる181例の生存率を報告した。主なる成績は、切除率68.7%、切除例4年以上生存率19%であつた。又現在の段階に於ては根治手術たる胃切除に於ても広範囲に切除し、出来るだけ完全に転移リンパ腺廓清をなす程生存良好にして、大體に存するII型が一番良性であると考えられる。

追 加

津田教授

最近教室に於ても癌の統計をとつてみたが85%の回答率で統計がとれた。開業医としては癌に対しては充分手を打つべきであり、手術に於てはリンパ腺のとり方が予後を支配し、早期に充分にとれば5年後50%の治癒率も生れる。故に40~50才の胃症状患者をもつた内科医は早く外科に廻して早期に手術する様にしたい。最近は前癌状態に於て手術すべきだと言われている。

21 男子乳腺腫瘍に就いて

岡大津田外科 越 宗 幸 重
広 沢 幸 一 郎

男子乳腺腫瘍は比較的稀な疾患であるが、私達は此度び、ギネコマステアの2例及び纖維腺腫の3例を報告し、併せて主として線維腺腫、ギネコマステ

ア、及び癌腫について文献的考察を加え、特に此の3者の類似点及び相違点について組織学的考案を述べてみた。

22 心臓手術に於ける血液漏出防止管としての心耳の応用

榊原十全病院 山本 周 他4名

私共は心臓内手術特に僧帽瓣手術に於て成長犬を

利用した実験に於て絹糸リ・アンの心耳根部の絞扼と、心耳外壁にゴムサックを縫着する事により、安全且容易に血液漏出を防止し一方血栓の流血中に遊出する事による脳栓塞の防止の可能性を大ならしめた。(映画供覧15分)

特別講演

最近の麻酔学

岡大陣内外科 福田 実